〔書　評〕

『東京語成立史の研究』

飛田良文著

田中章夫

一

著者の三十余年にわたる近代日本語についての研究の成果を、「東京語成立史」の名のもとにまとめたもので、その内容は、たいへん広範多岐にわたっている。

全体は三部四〇章からなり、「第一部・東京語研究の方法」は、「東京語」というもののとらえ方についての諸説の検討に始まり、東京語の時代区分・東京語資料の性格の考察に及んでいる。「第二部・江戸から東京語へ」は会話書の言語の分析から山の手ことばの形成を論じ、話しことば・書きことばの両面にわたって東京語の成り立ちを説いている。続く「第三部・東京語各論」は、「Ⅰ音韻・Ⅱ語彙・Ⅲ文法・Ⅳ文体文章・Ⅴ文字表記」の五節に分かれ、ここでは漢字音や訳語の問題・サ変複合動詞の一段化の現象・明治詔勅文の文体さらには振り仮名・句読法まで、近代日本語の、さまざまな問題がとりあげられている。

このすべてについて語ることは、とてもできないので、ここでは、書名にある「東京語成立史」に直接かかわる部分について述べてみることにする。というと、江戸語的な色彩が薄れて東京語系のことばが日本全国に浸透していく明治以降の言語状況全体を「東京語」の時代としてとらえようとする著者には、不満が残るところかもしれないが、その点はお許しいただきたい。

しかし、本書の読者が、もっともとまどうのは、やはり、右のような、著者の「東京語」のとらえ方ではないかと思う。たしかに、明治以降、新聞・雑誌・文学をはじめ学校教育や放送などによって、いわゆる標準語の普及がはかられ、各地の人々は、それを東京語系のことばとして迎えたのは事実であるが、標準語の形成となると、必ずしも東京語だけでなく、さまざまな問題がからんでくる。標準語の言語地理的背景[注1]もその一つであろうし、江戸語の普及度（共通語化）[注2]も無視できない。講義・講釈・説教・演説といった一対多の場面[注3]や挨拶・口上のような社交の場面でのことばの伝統あるいは口語文章の発達[注4]なども、当然、関係してくる。これを、「東京語」の定着ないしは展開と割り切ってしまうと、東京語にとっては、ちょっと荷が重すぎる感じがする。

さて、東京語成立史の方だが、東京語とはいっても、本書では、銀座・神田・上野・浅草・深川など、明治・大正・昭和の三代にわたって東京を代表する繁華街の東京語、いわゆる下町ことばは、ほ

とんど顔を出さない。この点は、東京生れの読者には、もの足りないかもしれないが、それは、江戸語以来、江戸・東京のことばは、山の手に居を構えた旧武家階級、特に旗本の人たちによってリードされ、そこに形成された「山の手の言葉」が、やがて標準語の基盤となる「東京語」につながるとする、著者の「東京語」観のためである。本書の最大の特色は、この標準語の基盤となった「東京語」の形成に、江戸在住の大名・旗本に代表される武家階級の、中でも「上士」の階層の人びとが、いかにかかわってきたかを刻明に考察した点にある。その手がかりとして、まず武家階級の人口動態・幕府の職制・武家社会の階層構造から、さらには、武士の新政府官員への移行状況にいたるまで、江戸末期から明治初期にかけての武家の動向を追っていく。一方、上士・下士・商人・農民の間に見られる、ことばの位相差についての意識を分析して、上士階層の言語の優位性を指摘する。それらをふまえたうえで、江戸の上層武家社会のことばが、東京の教養層にうけつがれ、著者のいう「東京語」が形成されてきた過程を解明しようというわけである。しかし、このプロセスを立証するうえで、一番の難点は、著者自身も認めている(一六四ページ)ように、江戸の上層武家社会のことばの実情をうかがわせる、まとまった資料がほとんど得られないことである。

そういう状況の中で、旧武家階級やそれに近い人びとをインフォマントとして作られた、いわゆる会話書は、まずとりあげるべき資料である。本書でもS・R・ブラウンの「日本語会話」、E・M・サトウの「会話篇」をはじめ種々の会話書について、編者の日本語観や階層意識を検討し、人称代名詞の選び方などを分析して、それが江戸の武士階級のことばを反映するものであり、のちの標準語に連なることばであることを説いている。

会話テキストである以上、会話書の類が、外国人の学ぶべき、その時代の、標準的な日本語に基づいて編集されるのは、当然なことであり、その意味で、のちの、いわゆる標準語の先がけというか、先取りしていることはたしかである。しかし、その一方で、現実に行われている以上、やや古めかしいことばや粗野な表現も、会話テキストとしては、無視するわけにはいかない。「日本語会話」でも、そうしたものが細かく例示されている。また、旗本出身の大槻文彦などから、武家では使わない下品なものとさげすまれている「デス」が、「会話篇」などに例を見るだけでなく、[注5]ガラタマの「英蘭会話訳語」では、その使用が推奨されている。会話書の類の、こうした一面を見ると、必ずしも、武家ことばの継承とか反映といった見方だけでは片付けられないように思う。むしろ、当時の東京のことば——いわゆる山手言葉をかなりよく写しているのではないかと思われる。

いずれにしても、会話書の類は、外国人の日本語学習という編集目的を考えると、それによって、ある特定の階層の言語のありようを推定するには、やはり限界があるといわざるをえない。

東京の山手言葉やいわゆる標準語は、江戸の武家ことばだと、一般によく言われることではあるが、それを証明するためには、やはり江戸語資料に散見される武士ことばや、明治初期の東京語資料に描写されている旧武家階層の言語について、発音・語法・用語にわたって、ある程度多面的な関連づけがほしいところである。

著者はまた、幕末から維新の動乱期に市内に踏み止まった旗本の人口の多さに注目して、旗本階層の「山の手の言葉」の「東京語」

への継承を説いている。しかし、人口比の上では、山の手地域に限ってみても、町人人口の方が圧倒的に多い。[注6] それに、東京に踏み止まっていたとしても、旧旗本階層に、ことばをリードしていくほどの権威というか、社会的なステータスが保たれていたかどうかも疑問に思われる。かつて、独特な権勢と遊女のタレント性をもって吉原の遊里の風俗・言語が江戸の町に強い影響を与えたことは、よく知られるところであるが、遊里の人口の動向とはかかわりなく、その独特な権威の消失にともなって風俗・言語の面での影響力を失っていった例[注7]なども考え合わせると、社会的権威を失った旧旗本階層に、ことばの面での指導性や支配力を、多くは期待できないと見る方が妥当ではなかろうか。

それはともかくとして、武家の人口動態を含めて、幕末から明治初期にかけての武家階層の動向の問題は、武家ことばの東京語への継承の証明としては、やはり傍証に止まるべきものであり、言語事実の面からの論証が、もう少しほしかったように思う。そのさい、さきにあげた助動詞「デス」のように、非武家ことば的（非「山の手の言葉」的）な要素が、早くから東京語に行われ、さらに標準語として一般化していったプロセスなどについても説明が望まれる。

江戸の武家ことばにくわしい小松寿雄は、その著「江戸時代の国語――江戸語」において、幕末期における武家ことばと町人ことばとの接近を論じて「武家言葉自体が、幕末には変質しかけていただろう」[注8]と推定し、「武家の言葉を特殊化し、隔離するよりも、武家の言葉と町人の言葉とのかかわり合いを考察する方が、はるかに実り豊かな視点であろう」[注9]としている。また杉本つとむも、谷崎潤一郎が「現代口語の欠点について」の中で語っている、旧幕臣・江原素六の訓話についての、つぎのような思い出話を引用し、

> 徳川の末期になると、旗本の武士も市井の町人と殆ど変らないサバケた口調を使ったもので、翁の言葉を聞いてゐると全く私の親父なぞの話しぶりと同じであつた。

「東京語とは何ぞやを考えるのに一つの参考資料となるだろう」[注10]と述べている。

著者の基本的な立場は、ある意味では、右のような見方とは対極に位置するものであり、こうした立場の論考に対する著者の見解についても紙面をさいてほしかった。

二

つぎに、「東京語各論」の方に移ると、かつて論文として発表された当時から敬服していたのは、連母音「ア・ウ」「オ・ウ」の成立論である。「笑う（ワロー→ワラウ）」「思う（オモー→オモウ）」のような、長母音から連母音への移行の過程を論じたもので、会話書や辞書類のローマ字表記の動向から、東京のことばでは、どちらも明治二〇年前後には連母音化が完了していたものと推定する。きわめて手堅い論証で、東京語についての著者の論は、まず動かないと思うが、周辺方言については、二重母音の長音化ということも考えられるので、必ずしも「オー」の方が原形とはいえないのではなかろうか。

個人的な興味で申しわけないが、「完了の助動詞『ちゃう』の成立」は、拙論[注11]と重なるので、やはり採りあげたい。「愛しチャッたのよ」「おらは死ジマッただ」の「～チャウ・～チマウ」の問題である。「～チャウ」について、明治二〇年代以降の用例を詳細に示してもらえたのはありがたかった。「～チマウ」の方は、それよりも早く「当世書

生気質」にあり、三遊亭円朝の「真景累ケ淵」にも、

新「冗談はよせ」作「いゝや。よせよ擽ぐつてえ」新「寝ツちまいな〳〵」（四十四）

の例があるが、この例は下総ことばを写したものとも見られる。

一方「〜チャウ」の方にも、拙論で指摘した通り、茨城方言による長塚節の「土」[注12]に頻繁に出てくるうえ、どちらの形も関東一円に分布しているので、周辺方言との関係にも触れてほしかった。

「各論研究」を読んでいて、時どき気になるのは、たとえば、ワア行動詞のウ音便形が、幕末から明治初期までは武家階層に保たれ、「教養のない人々には使用されていない（五六三ページ）」といった類の記述である。のちの山手言葉やいわゆる標準語が促音便になっている事実からみると、武家階層の「山の手の言葉」が「東京語」に継承されたとする著者の東京語観とは、ズレてくるのではないかという点がひっかかる。

また、「安愚楽鍋」や「二人女房」の用例分析に基づいて、明治初期の「指定表現」を論じた「Ⅲ語彙」の第一章の初めのところで、武士や旧士族は「〜ジャ」「〜デゴザル」を用い、「〜デゴザイマス」は町人・車夫に用いられ、「〜デス」は娼妓・新造・芸者・若い男女によって使われていたとする。さらに「〜ダ」は武士を除くすべての身分・職業・性別の人に用いられていたと、この時期の、この種の表現の多様性を指摘し、そのうえで、

そして、しだいに「でございます」「です」「だ」の三種に統合整理されていった。（三七六ページ）

と述べている。ここの記述でみるかぎり、武士のことばは、のちの東京語からは、はじき飛ばされてしまったことになる。

こうしたことから、山手言葉や、いわゆる標準語のルーツを江戸の武家階層のことばに限ってしまう著者の見方に、少々、窮屈さを感じるのは、私だけではないように思う。

三

著者の多くの論考の中で、短編ではあるが、見落すことのできないものに、本書の第三部Ⅲ文法の第五章に収められている「S・R・ブラウンのColloquial Japanese（C本）とPrendergast's Mastery System（P本）との比較論」がある。一八五九年（安政6）に宣教師として来日した編者が、明治維新をはさんで、一八六三年（文久3）に刊行したC本と、一八七五年（明治8）に刊行したP本とを比較したもので、まず、その着眼点のよさが際立っている。いうまでもなく、この時期は、東京の激動期であり、その間のことばの動きを観察していた外国人の目に、それが、どのようにとらえられているかは、きわめて興味深い。

著者によれば、発音については、C本もP本も、「シッパン（出帆）・キシクシャ（寄宿舎）・ジクす（熟す）・ジッセン（十銭）・ガイコク（外国）」のように「シュ・ジュ・グヮ」などが、「シ・ジ・ガ」と直音化している点は同じで、「江戸語・東京語の実態をかなりよく反映している」という（六二一ページ）。

それに対して、語法的な面では、C本とP本との間に、「ゴザリます→ゴザイます・ナサリます→ナサイます」「クダサレ→クダサイ・ナサレ→ナサイ」「ナサッた→ナスッた・クダサッて→クダスッて」「イラッシャッタ（〜て）→イラシた（〜て）」などの移り変わりが見

られるとしている。こうした調査の結果、「江戸語から東京語へと、言葉が江戸語の殻を捨てて現代東京語の姿を示してゆく過程の一端が明らかになったと思う（六三三ページ）」と述べている。

同一の編者によるC本とP本の記述の間に、このような語形の対応をとらえたことは、たいへん貴重である。

ただ、これが史的変遷を反映したものかどうかは、いささか疑問である。というのは、「ゴザイマス・ナサイマス」「クダサイ・ナサイ」「ナスッた・クダスッて」の類は、早くから江戸語に現われており[注13]、むしろ、こうした音便形の方が江戸ことばでは普通である。「イラシた（〜て）」も、その先蹤と見られる「イラシッた（〜て）」形で、人情本にはかなり出てくる[注14]。したがって、これらの語形は、「イラシた（〜て）」はともかくとして、C本が刊行された文久年間には、すでに江戸語では広く行われていた形である。

著者も指摘しているように、明治元年の「英蘭会話（篇）訳語」には、「……ナサレ、……ゴザリマスと書くべきを直に舌に従って……ナサイ、……ゴザイマスと記せり」とある（六三二ページ）。この記述からも、当時、「ナサレ・ゴザリマス」は書きことば的な形、「ナサイ・ゴザイマス」は話しことば的な形と見なされていたことがうかがわれる。

そうなると、C本からP本への語形の交替は、江戸語形から東京語形への推移というよりは、C本で採用した書きことば的な固い言い方を、P本では話しことばとしてこなれた言い方に改めたものとした方が妥当な見方のように思われる。そこに、当時のことばの様相が反映しているとともに、編者S・R・ブラウンの東京語への習熟度の進み具合が読みとれるのではなかろうか。

四

さきに、人情本のことに触れたが、かつて吉田澄夫は、一八三〇年代の天保年間に隆盛を見る、為永春水らの人情本に登場する男女のことばを、東京語の源流ととらえた[注15]。本書の著者が、「東京語の語法」として、明治になってから広く使われるようになったとする、打消「〜ナカッタ（五四三ページ）」なども、会話文の例はこの天保期の人情本に、はじめて姿を現わすものである[注16]。

人情本は天保十三年の禁令によって、一時とだえるが、弘化・嘉永年間から幕末にかけて、春水の門人らによって、かなりの数の作品が書かれている。これら幕末期の人情本は、文学史的には春水の亜流とされて、あまりかえりみられることもないが、ことばの面では、たいへん興味深いものをもっている。ここには、本書にとりあげられている「〜デショウ（五四三ページ）・〜マセンデシタ（五四五ページ）[注17]」をはじめ、のちの東京語につながる、様々な言い方が現われてくる。そればかりでなく、この時期の人情本には、たいへん洗練された、品格のある会話が、各所に見られる。たとえば、幕末期の一八六六年（慶応2）刊行の人情本「花暦封じ文」に出てくる、つぎの会話などは、その一つである。

貴方におなり遊ばしたら、御不足もなさゝうなものだと存じますが、ホンニ何事も苦の世界で御座りますな。さて若様、此の両三日は、滅切りとお寒うなりました。さア〳〵、火鉢の傍へお寄り遊ばせ。然様して今宵は、お泊りでも宜しいので御座りませう。（第十四回）

これは芸者の母親が、娘のなじみ客の武士の来訪を迎えての挨拶

であるが、小島俊夫は、この母親のことばを「当時の江戸市民のことばづかいとして、寸分のすきもない、おりめただしい」ものと評している。[注18]

本書の著者は、この時期の、この種の、町人ことばは「武家階級と交際するための江戸語（四二ページ）」であるとする。たしかに、このような格調のある町人ことばが形成されてきた過程には、長年にわたる武士と町人との交流や、町家の娘たちの武家屋敷へのお屋敷勤めの風習などによる、武家ことばの強い影響があったことはまちがいない。しかし少くとも天保期以降の町人社会には、そうした武家ことばから摂取した要素を消化して、品格のあるもの言いの出来る層が、すでに成長していたものと見られる。それは、挨拶などの社交の場だけにかぎらず、家庭内や店者同士のやりとりからも十分にうかがわれるところである。

袖「アノ旦那さま大変でございます」米「何だな仰山な。誰ぞ何様かしたのか」袖「イエ〳〵アノ桐生の旦那さまが、（略）入しつたンでございます」米「エゝナニ桐生の叔父さんが歟」袖「ハイたしかに夫に違ひございません」米「左様か。なるほど夫りやア大変だ。今時分何しに出かけたかしらん（略）」米「これは叔父さん、よくお出なさいました。さぞ御道中お寒うございましたらう。サア〳〵まア此方へ」万「お前にも替りないか。（略）此ごろはめつきりと寒くなつたノ」米「左様でございます。コレ袖や早くお火鉢を持て来な」（略）万「今日は慈母は何処へか出かけたのか」米「ハイ寺参りに往と言て出ました。モウ今に帰りませう」（三編・上・第十三回）

右は、一八三九年（天保10）年刊行の人情本「閑情末摘花」の一節である。やや古風なところはあるが、明らかに、のちの東京の山手言葉、さらには、いわゆる標準語につながることばである。

著者は、「東京語の時代区分（第一部・第二章）」で、明治以降の近代化・教育の普及・標準語化などの観点から、「東京語」の歴史を「成立期（国定読本の出来るまで）」「定着期（標準語の成立）」「展開期（共通語の時代）」の三期に分け、そのスタートを「学制」の発布にはじまる「学校制度の確立（四五ページ）」とする。そして国定読本の刊行を、その編纂趣意書などに基づいて標準語の制定と認め、国定教科書主導による標準語の普及と定着を高く評価する。さらに、太平洋戦争後の一連の国語施策や検定教科書制度への移行ののちは、「国として制定された規範的な（六一ページ）」標準語が失われ、「母体となるものが東京語として共通している（六二ページ）」共通語の時代と規定する。こうして著者の東京語観を追っていくと、なにか余りに制度的というか体制的な観点が強く印象に残る。たしかに、これも、一つの見方かもしれないが、江戸の住人から東京市民にうけつがれ展開してきた東京語の時代区分としては、もうすこし庶民のことばの流れがとらえられてもよかったような気がする。

以上、九百ページに及ぶ大著の、ほんの上っ面だけを撫でた書評で気がひけるが、スペースの関係ということでお許し願いたい。

終りに、一つの確固とした東京語観に基づいて、近代日本語のさ

まざまな問題を広く深く究明された著者の真摯な研究姿勢に心から敬意を表する。

注1　真田信治「標準語の成立事情」（PHP研究所・一九八七年）
注2　田中章夫「標準語（6・東日本の標準語――江戸ことば）」（誠文堂新光社・一九九一年）
注3　森岡健二「文体と表現（第5章・言文一致体成立試論）」（明治書院・一九八八年）
注4　木坂基「近代文章の成立に関する基礎的研究」（風間書房・一九七六年）
注5　松村明「明治初年の洋学会話書における助動詞『です』とその用法」（近代語研究8・武蔵野書院・一九九〇年）
注6　杉本つとむ「近代日本語の成立」（桜楓社・一九五九年）二七五～六ページ
注7　真下三郎「遊里語の研究（東京堂出版・一九六五年）」三七六～三七七ページ
注8　小松寿雄「江戸時代の国語――江戸語（東京堂出版・一九八五年）」二五四ページ
注9　右同書、一〇ページ
注10　杉本つとむ「東京語の歴史（中公新書・一九八八年）」二八二～三ページ
注11　田中章夫「東京語の完了表現『行っチャウ・死んジャッタ』をめぐって（論集日本語研究1・明治書院・一九八六年）」、「『言いシマウ』から『言ッチャウ』へ」（近代語研究7・武蔵野書院・一九八七年）
注12　大橋勝男「関東地方域方言事象分布地図」（桜楓社・一九七四年）MAP82・83
注13　山田正紀「江戸言葉の研究（武蔵野書院・一九三六年）」八五ページ、辻村敏樹「敬語の史的研究（東京堂出版・一九六八年）」二三八ページ
注14　湯沢幸吉郎「増補・江戸言葉の研究（明治書院・一九五四年）」一三七ページ
注15　吉田澄夫「江戸語の時代区分」近世語と近世文学（東洋館出版・一九五二年）
注16　中村通夫「『なんだ』と『なかった』」東京語の性格（川田書房・一九四八年）
注17　小島俊夫「後期江戸ことばの敬語体系（笠間書院・一九六四年）」第五章三「ませんでした」、松村明・前掲（5）論文
注18　小島俊夫・前掲（17）書二二二ページ

（平成四年八月十日発行　東京堂出版刊　A5判　八九八頁　二四〇〇〇円）

――学習院大学教授――

（平成五年六月十四日　受理）